

# 「民藝」における環境論理 — 日本の工芸文化が地球環境の問題解決に寄与できること

陳 景揚（東京大学大学院・台湾）

近年、「MOTTAINAI 精神」や「江戸時代の循環型社会」といった、ものや環境をめぐる日本社会がこれまで培ってきたローカルな知見が、いかにして地球環境の問題解決に貢献し得るかが国内外の注目を集めている。

本論では以上の観点に加えて、大正・昭和期に生きた宗教哲学者、柳宗悦が説いた「民藝」や「手仕事」の道具観に、エコロジカルなものとの関係構築のためのヒントを見いだしていく。柳による「用の美」、「使い込んだ美」に関する主張は、「使い捨て」という現代的な思考や物の取り扱い方に対し、一つの確かな反省と克服の可能性を示唆するものである。

筆者は現在、「民藝」と呼ばれる焼き物、特に栃木県・益子焼の生産、流通、消費をめぐる文化人類学的な研究に取り組んでいる。現代消費社会のただ中にある日本は、物で溢れかえっている。だが台湾から来た私の目には、日本の道具の考え方、そのエコロジカルな持ち方や使い方が非常に新鮮に映る。例えば台湾と異なり、日本ではたとえ大衆的で安価な食堂であっても、使い捨ての紙やプラスチックの器に料理が盛られて出てくることはない。洗ったり片づけたりと面倒であるにもかかわらず、循環的利用が可能な陶磁器を使うのが一般的である。

また、益子焼産地における調査中は、地域に根ざした手仕事にアイデンティティを見だし、便利な流通システムから敢えて距離をおいて、地元で採れる素材、用と美の融合にこだわったモノづくりに励む何人もの作家や職人と出会った。彼らはとくに環境への配慮からこのような手法を採用しているわけではないが、結果的に原料の輸送などによる環境への負担軽減に寄与している。

さらに、「民藝」や「手仕事」を愛好する人々の道具の取り扱い方には、趣味や流行を追って常に新奇なものを求めるといよりも、ものの素材感や手作り感を重視し、一つのものを長く持ち続け、使い込まれた艶や風合いを味わうといった、ものと環境にやさしい価値観を見てとれる。彼らは、飽きて物をすぐにゴミ化するようなことはない。このような「民藝」や「手仕事」に通底する道具観は、日本人全体からみればほんの一部分の考え方に過ぎないかもしれないが、それを実践することは使い捨ての蔓延による環境やゴミ問題解決の糸口であり、私の母国である台湾が日本から学ぶべきことだと考える。

文化人類学者は、しばしば旅に出て、馴染みのない地域社会の文化を調査研究する。その目的地は、いわゆる先進国や大都会よりも、発展途上国や資本主義の中心地から離れた辺境であることが多い。このような社会や地域文化の研究を通して、環境問題に関心を持った研究者の間には、次のような論争がある。一方の陣営の主張は、現代社会の人々は、生態環境の制約に敏感な人々（例えば、アマゾン奥地の村民やパプア・ニューギニアに住む人々）のローカルな知識と行動の諸様式に注目すべきであり、異なる生活様式の研究は、持続可能な進化や適応のプロセスに対する我々の理解を促進するというものである。他方、先進国や資

本主義社会の生活様式は未開社会のそれと根本的に異なるものであり、我々は森に住む人々から学べることなどないと反論する者もいる。後者は、市場の諸力に支配される現代社会の人間はもはや、自然が人格を有し人間と関係を保ち続ける存在だとは考えていない、と想定している<sup>1</sup>。

しかし、現代社会の人々が「森の人々」といかに異なる生活様式にあるとしても、市場の様々な力が、現代社会における知識や行動の諸様式と、「森の人々」のそれとを完全に断絶することはない。柳宗悦による「民藝」や「手仕事」の道具観は、その一つの可能性を示しているだろう。

芸術人類学者である中沢新一は、神話的思考、即ち人間と動植物が兄弟として分け隔てなく付き合うことが出来るという思考論理に、地球環境や他の生き物に及ぼす負担や苦しみを軽減するための鍵を見い出そうとしている。加えて彼は、西欧型の近代社会と合理的論理が広く浸透した現代社会が、近代以前にあったような神話的論理を取り戻すには、信念や宗教的イデオロギーよりも、むしろ芸術の力のほうが信頼可能であるとして、芸術人類学と環境問題の解決を結び付けるための指針を提示する<sup>2</sup>。また、西太平洋島民の貝やバナナ葉などの財の研究から出発し、ものと人間の関係に新しい理論的視点を構築した人類学者、アネット・B・ウィナーは、現代社会における芸術や宝物は、辺境地域社会の名誉財や呪物と同様に、集団の間、個人の間で、簡単にまた自由に販売や購入、贈与や交換、廃棄や処分がされず、所有者により持ち続けられると指摘する。ウィナーは、これらの持ち続けることにより価値が増えるもののことを「譲渡不可能な所有物」と称する<sup>3</sup>。

これらの二つの観点は、現代社会における道具の消費様式をめぐる環境問題への解決に重要なヒントを与えてくれる。服や家具、器といった消費財を「埋め込まれたエネルギー」として捉え<sup>4</sup>、消費者にとって道具を「持ち続けるもの」にすることが出来れば、言い換えれば「使い捨て」しなければ、ゴミの排出量も削減され、繰り返される新商品の生産・流通・処分に要するエネルギーも抑制可能となる。ここで重要なのは、現代社会の消費者である持ち主の愛着を引き出すには、信念やイデオロギーよりも、作られる道具の実用性や耐久性に加えて、道具自体が有する芸術性・美が必要とされるという指摘である。

近代日本社会において、道具を持ち続けることでその美的価値、使用価値が増すことの意義を最初に説いたのは、柳宗悦である。彼が民藝運動を立ち上げた大正・昭和期は、明治維新以来の工業化と都市化がようやく実現を見た日本史上初の「大量生産・大量消費」時代であった。柳は生活様式の激変の最中、生産や使用の価値が失われ、どんどん捨てられてゆく各地の日用品（いわゆる民具・民家・民器）に審美的・文化的価値を発見し、「民藝品」として都会の消費者に紹介した。今振り返れば、柳宗悦の民藝運動は近代日本社会に起きた道具をめぐる一つ

---

<sup>1</sup> 以上の議論は、パトリシア・K・タウンゼンド著、岸上伸啓・佐藤吉文訳『環境人類学を学ぶ人のために』世界思想社、2004、頁148を参照。

<sup>2</sup> 中沢新一『芸術人類学』みすず書房、2006。

<sup>3</sup> Weiner, Annette B. "Cultural Difference and the Density of Objects". 1994. *American Ethnologist* 21(2):391-403.

<sup>4</sup> Rita J. Erickson "Paper or Plastic" *Energy, Environment, and Consumerism in Sweden and America*. Praeger. 1997.

の大規模なリサイクル運動だとも言うてもいいだろう。

柳宗悦は、自然の素材、職人の技により作られる民藝品の美を「自然的」、「健全的」と論じる。柳が言う「自然的」とは、例えば焼き物の場合、単に器の質感やスタイルのことを指すのではない。それは土や薪や火という意味での「自然」であり、その美は人智によって作りえない「自然からの驚くべき贈り物」<sup>5</sup>である点には留意すべきである。柳にとっての「自然」は、人格を超えた「神格」をもつ、「神が仕組む天与のもの」<sup>6</sup>である。彼は「自然」とは人智でいくら探求しようとも理解しがたいものだと考え、「科学や芸術が進むにつれて、自然への尊敬は、もっと理由のはっきりしたものへと進みました」<sup>7</sup>と述べている。また、柳にとって「健全的」とは、職人の仕事が商業利益や美の創造のためではなく、使用者にとって丈夫で用に耐えるものづくりを目指すことである。彼は、「用のために作った器のほうがさらに美しい」<sup>8</sup>と主張する。従って、「健全的」とはある種の道徳的意味をも帯びた言葉だった。柳は道具を、「自然的」、「健全的」という規範的な基準から評価した。

柳の思想は神秘主義的、反科学主義的だと批判されるが、彼は、道具をただ人間が自分の都合で自由に操作、使用したり、廃棄できる対象とは考えていない。柳の道具観には、中沢が指摘するような、道具と人間の付き合いを可能とする神話的論理がある。柳は「地と隔たる器はなく、人と離れる器はない」、「工芸は伴侶であり、兄弟や姉妹である」、「器は一家の者たちである。否、器なき所にわが家はない。器を愛する者は家に帰ることを好む。器はよき家庭を結ぶ」と記している<sup>9</sup>。

柳にとっての道具は人間と同様、「生まれた」後の育ち方も大事なものであった。彼は「作物の後半生」という文章の中で、こう言う。「作物にも二つの生涯がある…。作る者の手で育つ間と、その手を離れて使う者の手に渡ってからと、それぞれに歴史が変わる」<sup>10</sup>。柳にとって、道具の美（＝用の美）とは持ち主の持ち方・使い次第で創造できるものだ。「よき用い手は器物の美を創造する」、「見ることは喜びである。しかし使うことの喜びはさらに深い。最も良く使われている場合ほど、器物が美しい姿を示す時はない。同じ家でも空家の時より、良く住まわれている時の方が美しい。…。なぜならその時最も美しさが活きるからである。ものがもっと温かく話しかけてくるからである。器がよく用いられる時、それは室を潤わせ心を美しくさせる」<sup>11</sup>。

以上論じてきたように、私は柳の民藝論の中で今の環境問題の解決に最も寄与できるのは、持ち主が良く使用して道具の美を育てることこそが、道具の美に対する喜びの源泉だという彼の道具観だと考える。上述のように、現代社会のゴミやエネルギー問題を解決するには、生活者が使う道具を使い捨てにせず、長く持ち続けることが有効な糸口となる。道具の美が道具の持ち主の持ち方・使い方により育てられるという柳の思想は、まさにものを持ち続け

<sup>5</sup> 柳宗悦『手仕事の日本』岩波文庫、1985、頁19。

<sup>6</sup> 同上、頁18。

<sup>7</sup> 同上。

<sup>8</sup> 柳宗悦『民藝とは何か』講談社学術文庫、2006、頁67。

<sup>9</sup> 柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫、1984、頁101~106。

<sup>10</sup> 柳宗悦、『茶と美』講談社、1986、頁65。

<sup>11</sup> 以上の引用文、同上、頁75。

ることによってはぐくまれたと言ってよい。新品の美しさや飾り物として眺める時の喜びよりも、むしろ道具が用いられる過程で使用者がその変化の味わいを発見する喜びこそが道具の美への最大の喜びである、という柳宗悦の発見・体験は、ものを持ち続けることの価値と意味を我々によりよく示してくれる。

柳が活躍した時代には、地球環境の問題はさほど大きな問題ではなかっただろう。彼の民藝運動が目指したのは、「美の王国」の構築であり、今で言ういわゆる「エコ」な社会ではなかった。しかし、彼の「美の王国」を構築するために必要とされた〈もの〉と人間の関係、つまり、道具を育てることは、実際、「エコ的」だとは言えないだろうか。現在の日本社会には、柳のように道具との会話を楽しむ感性や神話的な道具観を持つ人間は多くはないかもしれない。だが、柳のように用の美に惹かれ、道具に対して愛着や愛おしさ感じ、道具を育てるような気持ちで大切に使う日本人もまた少なくない。これが台湾社会にはない道具をめぐる日本の消費者文化だと私は考える。地球環境問題が差し迫る今、環境に良いテクノロジーの開発だけでは、「使い捨て」による環境問題は解決できない。21世紀に生きる我々にとって、柳宗悦の民藝論が持つ重大な意義は、〈もの〉との健全な関わりは世界を美しくすることであり、その射程に環境問題も包摂されるとは言えないだろうか。